

寺
ごよみ

一月

一日 修正会 年頭参り

三日 お寺の学校かるた会

栗虫助成会

栗虫・報恩講

七日 八日

雪ん子劇団けいこは

じめ

御正忌報恩講

一三日 昼一時 逮夜

一四日 昼一時 逮夜

一五日 朝一一時 お講・下村
昼一時 逮夜

夜七時半 初夜

一六日 朝一一時 お講・析屋・
熊野・大橋・浦山

昼一時 満座

本山布教使 原広道師

本山布教使 原広道師

寺報

善 巧

発行

〒938 富山県下新川郡
宇奈月町浦山497
白雪山 善 巧 寺
TEL・FAX (0765) 65-0055
TEL オテラザ 65-0975

元旦や

今日の命に

遇う不思議



親鸞聖人真向きの御影

一月十六日は親鸞聖人の御命日です。善巧寺では満座のおつとめに「嘆徳文」をあげます。此の「嘆徳文」は、覚如上人の著「報恩講私記」の上にさらに重ねて存覚上人が宗祖親鸞聖人の徳と法門を讃嘆されたものです。今日は、此の「嘆徳文」から、親鸞聖人の御一生を思うて見ます。「それ親鸞聖人は浄教西方の先達、真宗末代の明師たり」御承知のように聖人は若くして比叡の山に御入りになり慈鎮和尚の門に入られました。「聚螢映雪の苦節」とありますから螢の火、雪の明りで夜も眠らず御勉強になったのでしよう。日本の学問・中国の学問すべてに通じ、特に天台宗の学問を研究されました。併し、いくら勉強しても、識浪しきりに動き、妄雲なお覆う有様で、根本中堂の中尊、諸方の靈囀に詣でて、解脱の径路を祈り真実の知識を求め毎日でした。

此の時、思うところあつて京六角堂へ百日の間御通いになることになりました。その百日目の日の出頃、夢のお告げを受けられるのです。「数行の感涙に咽ぶ」とありますから、余程の感動だったのであります。法然上人(源空)の吉水の禪室に御出かけになるのです。ここではじめて弥陀覚王浄土の秘廬に入られるのです。他力か不思議の法門のことです。自力か

嘆 徳 文

ら他力へ。「歎喜踊躍乃至一念」の流通です。これからこの他力の門へ、貴族も平民も、僧侶も俗人も挙つて入ることになります。

聖人は、経・律・論・釈の中から大切なところを抜き出して、六巻の「教行信證之文類」を御書きになりました。私達は、この本を御本典と申して居ります。親鸞聖人の主著であつて浄土往生の簡要は、皆この中にあります。こんな立派な本はなく、こんな有難い本はありません。「他人いまだこれを談ぜず、わが師(親鸞聖人)独り存す」とあります。

考えて見ますと、法然上人が流罪に科せられたとき親鸞聖人も北陸の遠境に配流されました。其の後の御苦勞は、皆様御存知の通りです。

「居諸しきりに転じ涼煖しはしばば憐まる」とあります。その時、「貴賤の埒投避遁合掌す」とありますから、親鸞聖人のお姿に、皆んなが合掌したのです。

斯うして京都に御帰りになり九十有回生涯の終りを迎えてお浄土にお出かけになってから、年忌月忌報恩の勤め怠りなく、今年の御正忌をお迎えするわけです。

住職 雪山 俊之



墓参り

行信教校長

利井明弘師

父や弟の一周忌が終わったら、もう報恩講が目の前である。お取り越しの報恩講がすめば、私の寺の今年の行事は終わりで、あとは師走をウロウロと迎えるばかりである。

父のいない一人坊主の一年も、アツという間に過ぎてしまい、寒さには強いはずなのに、何故か秋風に首をすくめている。今年のお墓まいりには、私は何を思うだろう。

そういえば、年の終わりにもう一つ大事な行事が残っていた。



お墓まいりをしなければ…。

私の寺では、暮れの二十八日に京都の西大谷に、お墓参りにゆくことに決まっている。曾祖父の代からのいやそれより前からの恒例行事である。

朝九時半、高槻のホームで檀信徒の人たちと待ち合わせる。すべて例年通りだから案内も何もない。道順まで決まっているのだから。

京都に行くのに、わざわざ高槻駅までやってくる人がいた。ある年、京都駅で私たち一行を待ち、出口が違ったのか、すれ違ってしまった、一時間のズレのまま一日のコースを独りで回られた人がいたからである。すれ違ったと分かったら、コースは決まっているのだから、先回りすることもできたのに、それをされなかったところがこの人らしい。これは先年亡くなられた宮崎清先生のことである。こんなに、慎重な先生なのに、「反故

裏書之研究」を四年前にお書きになり、専精舎の副講もつめていたでいて、今からますます行信教の力になっていただこうと思っていた矢先に逝ってしまった。しかし、懐かしい顔が減るばかりでもない。待ち合わせの時間にお同行が一人息せききってやってこられたと思っ

たら、親父が何を言ってもこのお墓まいりに参加していただきましたので、私も跡を継がせていただきますということもある。

そして、常連の顔がそろったところで、電車に乗る。急ぐことはない、快速電車を見送って、一同は各駅停車の鈍行に乗る。暖かい車内に座っても、寒そうに肩をすくめておられた山本佛骨先生もおられない。ペレーに朱のマフラーをオーバーからのぞかせていたお洒落な父も、今年で欠席二年目である。ひと昔前は、京大の井上智勇先生も若く、一味会の松本さんや関田さんも常連だった。今はからずもひと昔前と言ったが、そう言いたい位この数年で、まわりがガラッと代わってしまった。父の元気な時から、親子揃ってお参りしているが、年頃の娘の姿を見て、早く嫁に出さねばならな

いと思ひ、ひよつとすると、今年が娘と最後のお墓まいりになるかも知れないと考えたりすると、この行事がいつになく大切に思えてきたりする。

東山の西大谷に着くと、正面の石の橋をわたる。左側の木陰に石碑が建っている。第一室戸台風で、たくさん学校の倒壊し、子どもたちが下敷きになったという。その時、子どもたちを助けようとして、生命を落とされた先生たちの殉難碑である。総代の橋長さんは、いつもここで皆と遅れる。橋長さんはこの室戸台風の時、校舎の下敷きになった小学生の一人なのである。

石段を上って、門をくぐると、松の枝をとおして正面に仏殿が見える。ここでオーバーを脱ぎ、服装を調べて最初の読経をする。

弟の隆弘は、この仏殿で結婚式を挙げた。弟は当時まだ新聞記者だった。だから友人の本職のカメラマンがたくさんいたのに、この時の式場内の写真は一枚もない。その理由は、あまりにも式が荘厳で華麗であったので、フラッシュをたくことをためらったからということであつた。

北陸の冬。昨年は十二月九日から降った雪が積み積って根雪になった。今年は中旬現在までカラリと晴れて雪はない。ご門徒の方々はこれを「一日一日のひろいもの」といつて喜ばれるで、そのよろこびようを、在家報恩講回りの折りに交わすあいさつの中からひろってみると――「なんちゅけつこうな空ながよ、去年はもうブルトザー走ったがにねー」「おらとこの寺のごばさまいらつしやると雪んなるちゅうていわれとりますがに、今年は降らんで良かったわねー」「こりややつぱりグンのクビ洗わつしやつたからやろかねー」このグンのクビというのがわからない。だれに聞いても知らないという。いいことがあったら、だれかが首を洗ったからだというのだろうか。とにかく、雪なしの報恩講は、どこへ伺ってもまずこんなあいさつだ。▼では、これが、ちょっと悪くなるとうなるか。先日、冷たい雨が降った時のこと「ようこそられました。雨で足元が悪かったでしょ。けど、

赤光白光

雪山隆弘

(本願寺新報九七・三・三より)

ばりにボウーと浮かびあがった新婦の美しさは夢のようだった。内陣の吊り灯籠や燭台の火が、螢が飛んでいるように点いて、チラチラと炎がゆれていた。雅楽の笙や箏（ひちりき）の音を耳にしなが、私は思ったものである。もう一度できるのなら、私もここで……。

今年は娘にこのことを話してやろう。

仏殿を左にまわって二天門をくぐる。前に広がる砂利の正面に祖廟の明著堂がある。右手に歩いて覚信尼公の碑の前を通り無量壽堂に入る。最後に明著堂の前でお参りし、北門から出る。北門のすぐ前の線香屋で線香に火をつけてもらい、時々ボツと燃え上がる火を吹きけしながら、坂道を上る。昔、入口のところにお墓があったところを右に曲がって墓地に入り、一番下の谷底にある新勧学谷に参る。

因縁のあった古い和上たちのお墓に、お線香をひとつひとつあげてお参りをし、その方たちの業績や人となりをいつも父はここで話してくれた。

生前にお会いしたことがない私には、その話がか遠い昔話のようであったが、時代は遷るものである。宮崎円達先生、桐

溪和上、大江和上、神子上和上、普賢先生……、今年は、私も子どもたちにあふれる思いを語らずにはおられないだろう。

新勧学谷の横に曾祖父明朗の墓がある。数年前、榎の木でかこまれてあまりに木が茂りすぎていたので、鋸をもって行つて切り払ったが、深く切りすぎてとうとう枯れてしまったようである。去年はまるでステッキを突き刺したように、切り株はまだ残っていたが、今年はどうなっているだろう。この明朗の墓から、迷路のような細い道を上つて、次に行くのが旧勧学谷である。入口にあたるところに、弟の養子先の雪山家の墓がある。弟の納骨は済んでいるのだろうか。この旧勧学谷は、丁度、行信教授の専精舎で毎年やる、会読の勉強のように、向かいあって二列の勧学さんたちのお墓が並び、判者や講師や典座が並ばれるように正面に三つのお墓が並んでいる。この正面が雪山家の先祖で、空華学派の祖である僧鎔師の墓である。

この学派を僧鎔師没後二百余年の今日、学び守っているのが行信教授である。弟にこの雪山家との縁談が持ちあがった時に父がお前がいやなら私が行きたいと言った意味がこれで分かつ

てもらえるであろう。父にすれば学問の祖に里帰りするようなものであったのである。

その僧鎔師の墓の左後ろに、曾祖父鮮妙の小さいお墓がひっそりとある。曾祖父二人のお墓を参れば、あとは利井家の墓に参るだけである。まわりに摂津の在の人たちのお墓がたまたまいて、まだ、線香が煙をたてていたりすると、あの家の誰が参ったのかなあと思ったりする。お参りを終ると道に出て真っ直ぐ清水さんに上る。三年坂までブラブラ歩き「七味屋」で一

味・七味・山椒を買うと昼である。昼飯は高瀬川のはとりで鶏の水たきと、これもなぜか決まっているのである。ここで一同年末のご挨拶をして解散となるのだが、我が家はそれと、おせち料理の材料を錦小路に買い出しに行く。祖父の時代にはこの食事と買物の間に映画を観るということが道順に入っていた。その時観た鞍馬天狗の頭巾と、帰ってから夕食の粕汁を、ヒゲにいつぱいつけて食べていた祖父の姿が、今でも印象に残っている。『蓮如上人御一代記聞書』第四六条「一、赤尾の道宗申され候ふ。一日のたしなみには朝つとめにかかさじとたしなむべし。一月のたしなみにはちかきとこ

ろ御開山様（親鸞）の御座候ふところへまゐるべしとたしなめ、一年のたしなみには御本寺へまゐるべしとたしなむべしと云々。これを円如様きこしめしおよばれ、よく申したると仰せられ候」。また、たしなみのない一年を私は送ってしまった。せめて報恩講とお墓まいりで日頃のご恩をかみしめたいものである。

（二味第六四号より）



寺
こよみ

二月

- 一日 お講・浦山
- 三日市・報恩講
- 五日 白鶴会新年会
- 一二日 生地・荻生・報恩講
- 一三日 お講・下立
- 一六日 下立・報恩講
- 一八日 舟見・報恩講
- 二一日 入善・泊・報恩講
- 二五日 栃屋・熊野・報恩講
- 二七日 浦山・報恩講
- 二九日

雪にならんでよかったわねー」そして風が吹くと「それでもまあ、荒れんでよかったですわね」と、必ず今日一日のお天気をほめるのだ。▼気象では、良い天気、悪い天気とはいわないという。雨なら雨の天気、風なら風の天気：それもそのはず、みんな自分の都合でいい悪いといっているだけなのだから。いや、これは、お天気だけのことではない。人だってそうだ。いい人、悪い人はいない。あの人はあのなりに、この人もこの人なりに一生懸命生きている。みんなお天気ぐらいに人をほめられたら、いいだろうに……。

お祝いにかけて下さった木村梢さんを迎えて、お寺座サロンで度イブ・トーク「木村梢さんと共に」が、なごやかに行われました。

元氣のする闘病記としてサンケイ新聞に半年連載された雪山隆弘の随筆が、著書「ブッドバイ」として百華苑から出版され多くの方によまれています。

一周忌に合わせて出版した仏典劇本「観無量寿経」も注文が相ついでいます。

満洲國でもらつた棒も、提督の地獄から淨へて救
あつて、十月に満洲金を開
われていく。

出版された雪山さんの「ブッド・パイ」

小西竹文

[illegible]

がんと闘い書き上げた戯曲

観
仏

三台城の悲劇
分かりやすい芝居に

1日も早い上演を

「ブッドバイ」
仏典劇本「観無量寿経」

雪山隆弘著

[illegible]

事であつてしまつたとは
思ひださう。なほ心には
第三者はいないが、言
草。やばり置もは
想ひださう。思ひださ
情を率直に述べたこと
である。

地獄について。今現在
私の心にあるものは「
しハラキ立て、自らを
つて都合が悪いものを
てなくやと思つて」
その心のまが、つは地
獄そのまがだと言
そして「わが心の地獄を
豊かな人になつて」と
心を明快に書くこと感
銘記。

へ雪ん子が物語に

「雪ん子劇団物語」(仮題)が今年の夏、小学館から出版されます。編集部の横内さんは映画化も考えたいというほどの力を入れようで、昨年の夏に現地取材をおえた作家の武良竜彦さん(写真左)が目下執筆中。

雪ん子旋風が今年も起りそう、乞御期待!



へありがとう

「荷車ひいて河原を渡って、野菜をもらいに行ったもんじや」故野畑市右衛門さんがよく語っておられました。それが今でも続いている、報恩講、お正月には、各地から門徒の方々がとどけて下さいます。

野畑一雄さん—報恩講お華束用もち米

下村—報恩講用里芋
音沢—報恩講用大根

栃屋・熊野—正月お鏡用もち米
こうした皆さんのおかげで、報恩講やお正月の準備ができました。本当にありがとうございます。

十二月一日 日曜日 曇

お講の日である。午前中から台所は忙がしい。今日は、総代世話方に御願いで境内清掃の仕事をして頂くことになっている。男女十六名が午前九時から夫々の清掃作業について下さる。大公孫樹は既に散り終って見た目は美しいが、落葉を掃き集めて片付けるとなると中々大変だ。裏庭には大きな紅葉が一本あって、此の落葉が又、一面に散り敷いている。這い一位の木の上も一面に落葉が溜っていて、清掃作業といっても一筋縄には行かぬ。でも、流石人数の故か、仕事は捗って見る見る内に見違えたように綺麗になる。天候の方も、昼過ぎには日も射してくるほどのおだやかな日和になる。

お講の方は、何時ものように十時半に鐘がなり、十一時半におつとめがはじまる。今日は日曜日なので、孫の教隆も出仕する。おつとめは仏説阿弥陀経。五人でつとめるから賑やかな感じがする。終って説教一席。蓮如上人御一代記聞書から、「御代にて仏法を仰せたてられんと思し召し候御念力一つにて御繁昌候ふ」の百四十二章を話す。何時もの方々の他に、今日は清掃従事の総代方も聴聞して話に実が入る。

昼はお講の御馳走。大根、人参、牛蒡の炊き合せ。今日は、四時から上げ法事の予定があり、見ると娘さんが高等学校の先生



住職日記

それ迄の間に寺報の原稿を書く。一月発行だから御正忌のことを書く。嘆徳文を引きながら、聖人の御一生を千字内外の文章にする。「寺報善巧」第一号からずっと此の欄は住職が書くことになっっているが、それなりに苦労する。三時半に生地から上げ法事の御夫婦が見える。今日は弟の祥月命日。十三

回忌に当る由。一周忌、三回忌、七回忌と何時も此の十二月一日につとめてきたという話である。律義な、そして元気な方で、一見若そうにしているが聞いて見ると娘さんが高等学校の先生

冬景色 此処黒部川扇状地
善巧寺 金色浄土 大公孫樹

二日 浦山・報恩講
六日 太子会
一三日 お講・栃沢
一六日 総代会
一九日 雪ん子劇団春の公演
二八日

寺

三月

一日 お講・浦山
黒西組仏教婦人会連盟
研修会



へよろしく
「年に一度のほんこさん」親鸞聖人のご法事をおつとめしている門徒報恩講。今回は照行寺の若はん巧さんがごあいさつをかねて一緒にまわらせてもらっています。大銀杏樹の下を歩いていても、明教院さまもここを歩いておられたと思うと感動してしまいますという釋巧照さん。僧侶師の書物も勉強中、どうぞよろしくおねがいします。

おのりの女

雪山玲子

鹿児島
の仏婦から札幌の宗門の高校まで、故若院隆弘のあとを慕うかのように、若坊守が各地をおたずねしています。
そして、もったいないことでありますが、高田派御本山からお招きをいただいて、三月十一日の仏婦のお集まりにお伺いすることになりました。九月の法要にお出ましいただいた御礼と、

いのちの絆

長女が自坊に就職

今年もおまいりいたしまししょう

善巧寺年中行事

修御太落祠盆盆報空除
の
泊 堂 語 誕 子 正 正
恩 踊 聞 生
夜 華 踊 堂 語 誕 子 正 正

会 忌	1 月 1 日
会 忌	1 月 13、16 日
会 忌	3 月上旬
会 忌	4 月 29 日
会 忌	6 月上旬
会 忌	7 月 16、19 日
会 忌	8 月上旬
会 忌	8 月 15 日
会 忌	8 月 16 日
会 忌	10 月 19、20 日
会 忌	11 月 4、5 日
会 忌	12 月 31 日

〔おねがい〕

十二月一日と十六日に
清掃奉仕が行われました。
総代会、白鶴会、お世話
方が集って、境内、裏庭、
屋上、屋内などの清掃を
していただきました。
例年、総代会で行って

いたものですが、若い方からお
申し出があり、今年から、みなさ
んに清掃奉仕をおねがいするこ
とになりました。
毎月一日と十六日、午前九時
から十一時まで、時間のとれる
方おねがいいたします。

おひと 作と法 合掌・礼拝

○両手を合わせて胸の中央にか
るくつけ、指をそろえて約四
十五度上方にのびし、念珠を
かけて親ゆびでかるくおさえ
ます。(写真上)

○肩、ひじをはらず自然に、目
は仏さま
の方にむ
け、そし
てしずか
に念仏し



○礼拝は、合掌したまま上体を
約四十五度かたむけてお礼を
し(写真下)上体をおこして
から合掌をときます。

じゆずをかけて、合掌すると
き、そのとき
こそ、人の心
がいちばん純
粋になるとき
です。



若院の著書県内書店に

釋隆弘法師の著書「お茶の間
説法」「続お茶の間説法」「続々
お茶の間説法」煩惱カルタ本願
カルタ「ブッドバイ」「観無量寿
経」の六冊が富山市総曲輪の瀬
川書店、魚津と、黒部メルシー
の山谷書店で発売されています。
昨年二月一日に発刊された
「ブッドバイ」は半年で第五刷
に。もちろんお寺でも販売して
います。病の床にある方がこの
本でどんなに元気づけられたか
と云って下さい。あなたも
ぜひお読み下さい。



雪ん子今年もがんばります

雪ん子劇団、去年のしめく
りは、本願寺派で毎年行ってい
る歳末助け合い募金運動と、県
民会館で十五日に行われた「第
四三回愛の年末児童大会」でし
た。バスガイドさんが「テレビ
や新聞で知っていますよ」とい
うほど雪ん子は有名なようで、
今年もすでに出演交渉が相つ
いでいます。

チューリップテレビで女先生
が立川志の輔さんと対談したこ
縁で、二月十四日には、オルピ
スで開催される「志の輔クラブ」
で一口らくごを披露することに
なりました。二月二十三日には、
午前には砺波の東部小学校、午後
は、高岡の文化ホールとダブル
公演、八月はジャパンエキスポ
富山で公演、そして金沢の児童
劇団との交流公演、十一月一日
は、石川県で行われる国民文化
祭の第一回児童演劇祭に出演し
ます。県外からのおさそいも多
く、今年も忙しい年になりそう
です。どうぞ暖かいご支援を!

善巧寺の 常例行事

お 講	毎月 一日・十六日
お 寺の学校	正月 春盆暮れ
雪ん子劇団	毎週 月曜四時
花の会	毎月 第一火曜日
お 経の会	第一・第三土曜日

合 掌

この寺報を隆弘からひきつい
で、丁度一年になります。人間
の生老病死を、四苦八苦を思い
きり感じさせられる一年でした。
悲嘆に暮れながらも、助けられ
助けられ、何とか歩いていきます。
見知らぬ土地に行つて、懐か
しい暖かい心に出逢います。
慣れない文章をかいて、いろん
な方から励ましていただきます。
カメラの前にたち、そこから
ご縁がひろがります。
まるで共にいる時の様に過し
ている不思議を感じます。

十六日で八十一才になる住職
もおかげさまで元気です。五十
二年連れそう坊守も元気です。
善巧寺に就職して一年になる
会館主事長女有花は活発に仕事
をしてきています。

俊隆・教隆は勉学にはげみな
がら、寺役を手伝っています。
照行寺はあとつぎがお手伝い
をはじめて大安心。

法輪寺もそのうち、乞ご期待。
今年もどうぞよろしくお願
いします。

